K-10

非定常加熱が二液滴の自発点火時における冷炎発生位置に与える影響

Effect of transient heating on the position of cool flame appearance as spontaneous iginition on droplet pair

○西野 啓太¹, 池澤 英明¹, 大野 友利恵², 齊藤 允教³, 田辺 光昭³ *Keita Nishino¹,Hideaki Ikezawa¹,Yurie Ohno²,Masanori Saito³,Mituaki Tanabe³

Abstract: The position of cool flame appearance at spontaneous ignition of droplet pair was investigated by two-dimensional axisymmetric calculation with and without transient heating as a basic study of *PHOENIX-II* project. The fuel was *n*-decane of 1 mm in diameter. Inter-droplet distance was 8 mm. Ambient temperature and pressure were 600 K and 0.1 MPa, respectively. The reduced reaction mechanism including 287 reactions among 77 species was employed. As a result, mixture condition was lean and OH mass fraction was large at inter-droplet area. Therefore, it is possible that OH affect cool flame appearance position.

1. 緒言

現在の内燃機関の多くは噴霧燃焼を用いた燃焼方式 となっている. 高温高圧の燃焼器内で, 自発点火に伴 う熱発生による圧力波の増強が燃焼器の破壊に繋がる という問題点がある. 噴霧燃焼は燃料液滴の微粒化に よって噴霧が形成され,蒸発,自発点火,燃え広がり という複雑な物理的・化学的な過程を経る. 高級炭化 水素系燃料の場合、発熱量の大きい熱炎が生じる前に 低温酸化反応によって微弱な発光を伴う比較的温度の 低い冷炎が発生する.燃料液滴の自発点火は冷炎によ って支配されるため^[1],冷炎の挙動を詳細に調べる必 要がある.複雑な噴霧燃焼の予測には、計算コストの 観点から安価でかつ高精度な簡略化計算モデルの開発 が望まれる.一方で計算モデルを検証するためには, 重力による自然対流の影響を排除した微小重力環境で の実験によって得られる基準データが有用である.こ の実験データ取得のために PHOENIX-II プロジェクト [2]では観測用ロケットを用いた点火限界近傍での液滴 列燃焼の実験を予定している. 齊藤ら³³はこのプロジ ェクトの基礎研究として簡易的モデルを用いた二液滴 の数値解析を行った.また、大野らは14非定常加熱を考 慮した二液滴の計算を行った.本研究では齊藤らのモ デルと大野らのモデルを用いて二液滴の計算を行い, 非定常加熱を考慮した場合と考慮していない場合での 冷炎発生位置の違いについて議論した.

2. 計算条件及び計算方法

計算条件は二次元非定常軸対称とし,雰囲気温度は 600 K,雰囲気圧力は 0.1 MPa とした.初期液滴直径は 1 mm,液滴間距離は 8 mm とした.燃料は *n*-decane (C₁₀H₂₂)とした.C₁₀H₂₂の化学反応モデルは,Qiu らに よる簡略化モデル(77 化学種,287 反応)^[5]を用いた.燃 料質量流量と液滴表面温度の変化は Figure 1 に示す齊 藤らのモデル(case 1)と Figure 2 に示す大野らの蒸発計 算(case 2)を用いた.



Figure 1. Time history of mass flow rate and droplet





Figure 2. Time history of mass flow rate and droplet surface temperature (case 2)

計算領域中の最大温度の上昇率 dT/dt が極大を迎える 時間を誘導時間 τ と定義し,最大温度上昇率極大値の 95%に達した時間を τ95 と定義した.

3. 結果および考察

Figure 3 及び Figure 4 に, τ 及び τ₉₅ における x 軸上 での化学種の質量分率 Yi と温度の分布図を示す.

1:日大理工・学部・航宇 2:日大理工・院(前)・航宇 3:日大理工・教員・航宇



Figure 3. Species and Temperature distributions along axisymmetric boundary (case 1)



Figure 4. Species and Temperature distributions along axisymmetric boundary (case 2)

Figure 3, 4 における x 軸は Figure 5 に示す通りである.



Figure 5. Schematic of the data sampling axes

Figure 3 より、 τ₉₅において case 1 では液滴の内側で は OH がほとんど滞留していない.一方で Figure 4 か ら、case 2 では液滴間の内側と外側で同量の OH が滞 留している.液滴間の外側と内側での温度を比較する と、case 1 では外側で温度が高く、case 2 ではどちらも 同程度の温度となっている.また τ において、どちら のケースも液滴の外側に比べて内側で多くの OH が滞 留している.しかし、case 1 では液滴の外側、case 2 で は液滴の内側の方で温度が高いことが確認できる.さ らにどちらのケースも液滴間の内側では燃料が希薄で あることが確認できる.したがって燃料が希薄で温度 が高く、OH が多く滞留していることが液滴間での冷 炎発生位置に影響を与えている可能性がある.

4. 結言

・燃料が希薄で温度が高く,OHが多く滞留している ことが液滴間の冷炎発生位置に影響を与えている可能 性がある.

5. 謝辞

本研究はISAS-JAXAフロントローディングプロジェ クト及び小規模計画,JSPS科研費JP19K04843及び日 本大学学長特別研究よりご支援をいただきました.

6. 参考文献

- [1]M.Tanabe, et. al : "Spontaneous Ignition of Liquid Droplets from a View of Non-Homogeneous Mixture Formation and Transient Chemical Reactions", Twenty-Sixth Symposium (International) on Combustion, 1996, 1637-1643
- [2]M.Saito et.al : "Preliminary Study on the Experiment for the Spontaneous Ignition of Fuel Droplets using the TEXUS Rocket", Twenty-Ninth JASMAC, 2017, 27A05
- [3]M.Saito et.al: "Spontaneous Ignition Behavior of n-Decane Fuel Droplet Array near Ignition", Int. J. Microgravity Sci. Appl. 36, 2019
- [4]Y.Ohno et.al: "Analysis of Cool Flame Oscillation at Spontaneous Ignition on Droplet Pair using Numerical Calculation with Transient Heating", jasmac-32,2020,OR-0708
- [5]L.Qiu, et. al : "Development of a Reduced *n*-Decane/α methylnaphthalene/Polycyclic Aromatic Hydrocarbon Mechanism and Its Application for Combustion and Soot prediction", Energy Fuels 30, 2016, 10875-10885